The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エディプス・コンプレックス・モデルとしての「科学的心理学草稿」 : 初期フロイト理論の再検討
Author(s)	竹中, 均
Citation	年報人間科学. 1993, 14, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7900
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エディプス・コンプレックス・モデルとしての「科学的心理学草稿」

―初期フロイト理論の再検討―

竹中　均

1. エディプス・コンプレックス理論再検討における「科学的心理学草稿」の重要性

エディプス・コンプレックスという概念は、フロイトにより提起されて以来、約一世紀の間、多くの論議を引き起こしてきた。父―母―子の三角形をめぐる葛藤のメカニズムは余りに有名である。このメカニズムを受け入れるにせよ受け入れないにせよ、エディプス・コンプレックスという概念が何を表すかについては、もはや疑問の余地はないように見える。

しかしながら、ラプランシュ・ポンタリス『精神分析用語辞典』によれば、「フロイトはどこにもエディプス・コンプレックスの組織的な説明はしていないのである」[1]。とすれば、私たちのエディプス・コンプレックスについての「常識」も、フロイト自身によるオリジナルというわけではなく、多かれ少なかれ後世の研究者による再構成だということだ。ならば、エディプス・コンプレックスについての「常識」を、もう少し慎重に考え直してみることも出来るはずだ。

それでは、どのような視点を取れば、エディプス・コンプレックス概念の再検討を行えるのだろうか。筆者が本稿で試みようとしているのは、「科学的心理学草稿」（以下、「草稿」と略する）というフロイトの初期論文（一八九五）に注目するというアプローチである[2]。「草稿」は、著者の生前には公表されることなく、また著者自身、公表することを望まなかった私的な論文であるにもかかわらず、フロイト理論全体の中で、良くも悪くも、特異な位置を占めている。このような特異な論文の視点を取り入れることによって、エディプ

ス・コンプレックス概念の洗い直しが可能ではないか、と考えたのである。

まず、「草稿」が、フロイト理論全体の中でどのように位置づけられてきたのか、スタンダード版フロイト全集において「草稿」の冒頭に付けられている、ジェイムズ・ストレイチーによる“Editor's Introduction”の中の‘(3) The Significance of the Work’の部分で見てみよう。

ストレイチーによれば、「草稿」には、マイナスに評価される面とプラスに評価される面とがある。まず、マイナスに評価されるについては、二つの要因がある。第一に、「草稿」成立の経緯と、著者自身による評価とである。つまり、この著作は、執筆途中で放棄され、後年のフロイト自身によって、その価値を否定されていたという点である。[3] そして、第二の要因は、「草稿」において展開されている議論が臨床的な事実の裏付けを持たないという点である(「性の臨床的意義と理論的意義との不愉快な分離[4]」)。

以上のように、マイナスに評価すべき理由を挙げる一方で、ストレイチーは、プラスに評価すべき理由も挙げている。つまり、「草稿」は、「見かけ上は神経学の論文であるにもかかわらず、実は、後年のフロイト心理学理論の大方の核心部分をその中に含んで」おり、「「草稿」は、というより「草稿」の見えざる亡霊は、フロイトの全ての理論的著作に最後までつきまとっていたのだ。[5]」

だが、この引用の表現の調子からも察せられるように、ストレイチーはどちらかと言うと、マイナスの評価の方に重点を置いており、これが、権威あるスタンダード版の評価として、一般的な評価を代表していると言える。

このように「草稿」は今までアンヴィバレントな評価を与えられてきたわけだが、本稿では、「草稿」がフロイトの理論的著作の隠された底流として、隠然たる力を持ち続けたという点に注目したい。[6] とりわけ、注目すべきなのは、『夢判断』の「第七章　夢事象の心理学」への「草稿」の影響だ。場合によっては、「第七章　夢事象の心理学」とは、神経学的用語法を用いた「草稿」を心理学的用語法へと「翻訳」したものだ、とさえ見なされている。[7]

それでは、「草稿」の重要性とは、〈フロイト理論が、そのごく初期から、その後の展開の可能性を内包していたことを証明した〉という点にあるのだろうか。そのような意味での重要性も確かにあるだろうが、本稿で論じたいのは、それとは違った重要性である。

今仮に、「草稿」が、エディプス・コンプレックス概念を含む後年のフロイト理論の原型――より精確に言えば、神経学的用語法で描かれた原型であるという見方を受け入れたとしよう。そうすれば、「草稿」の中で展開される心的装置のモデルの中に、エディプス・コンプレックス概念に対応する概念を見出すことが出来るはずだ。そして実際、「草稿」の中に、それらしい概念装置を見出すことが出来る。しかしながら、「草稿」モデルの中に見出せるエディプス・コンプレックス概念と、後年の〈本当の〉エディプス・コンプレックス概念との間には、決定的に異なる点がある。つまり、「草稿」モデルでは、後年の〈本当の〉エディプス・コンプレックス概念に

とって不可欠の要素である父に対応する要素が登場しないのである。

より精確に言えば、「草稿」には、父だけではなく母も登場しない。ただし、おおよそ母に対応すると見ていい要素は登場する。それは、「経験豊かな個体 an experienced person」[8]であり、それは、自力では生存を維持できない幼児を世話する養育者のことだ。幼児自身を第一者と考えれば、この「経験豊かな個体」は第二者である。後年の〈本当の〉エディプス・コンプレックス概念では、これら二者に、第三者である父が関わることで、メカニズムが展開していくわけだが、不思議なことに、「草稿」モデルでは、この第三者が登場しないのだ。「草稿」モデルにおいては、この機能は、第三者の介入ではなくて、「自我による禁止 inhibition by the ego」によって担われている[9]。そして、この「自我による禁止」を、内面化された第三者のようなものによる機能として見なすことは、難しいように思われる。

この違いは根本的だと思われる。なぜならば、〈本当の〉エディプス・コンプレックスでは、三者関係が問題になっているのに対し、「草稿」モデルでは、二者関係が問題になっているのだから。二者か三者かという違いは、エディプス・コンプレックスのメカニズムそのものに関わる違いであり、部分的な修正によって結びつけることは出来ないはずだ。

しかし、次のような反論があるかも知れない。すなわち、「草稿」では未だ、理論的に完成途上だったのであり、後年に至ってはじめて、〈本当の〉理論—三者関係から成るメカニズムに到達したのだ、だから、未熟な「草稿」モデルが二者関係から成っていたとしても、大して問題ではない、と。だが、それならば、「草稿」に対して概して否定的だったストレイチーですら認めざるをえなかった事実、すなわち後年の円熟期の理論的著作に対して〈未熟な〉「草稿」が影響を与え続けたことを、どう理解したらよいのだろうか。

このような問題を孕んだ「草稿」モデルの立場から、常識化したエディプス・コンプレックス概念を洗い直そうというのが、筆者の考えである[10]。

2. 「草稿」第一部の論理展開

まず、「草稿」第一部で述べられていることを要約しよう。「草稿」モデルは、人間の心的装置を、ニューロン・システム内を流れ滞留する欲動エネルギー（「草稿」においては、「量Q」という言葉で呼ばれる）の増減均衡によって説明しようとする。心的装置モデルを構成するにあたって、フロイトが注意したのは、心の中の現象と一口にいっても、外界からの刺激による現象と、心の内側からの刺激による現象との二種類がある、という点である[11]。筆者なりの解説をしよう。たとえば、心的装置の中に、馬のイメージが現れたとする。この場合、外界に現実に存在する馬を知覚したために馬のイメージが現れた場合もあるだろうし、また、現実にその場に馬がいなくても、記憶の中から馬のイメージが現れた場合もあるだろう。もちろ

ん、この記憶の中の馬のイメージも、元々は外界に存在する馬の知覚を原料としていると考えることは出来る。しかし、たとえば一角獣のイメージが心的装置の中に現れた場合には、そのイメージは、外界に対応物を持たず、心の内側からの刺激による現象と見なさざるをえないだろう。

このような心的装置の働きを説明するために、フロイトは、ϕ ニューロンとϕ ニューロンという二種類のニューロンを想定する。[12] ϕ ニューロンとは、外界に曝された感覚器官と直接結びついている「(なんの抵抗もしないし、なにも滞留させない) 透過性」のニューロンである。一方、ϕ ニューロンとは、「記憶の担い手であり、それゆえにおそらく心的現象全般の担い手である (抵抗を持った、量Q_ηを保持する) 非透過性」のニューロンである。後者のϕ ニューロンが受け取る量Qには、二種類ある。一つは、ϕ ニューロンからの量Q (「外部からの刺激」) であり、もう一つは、「内因性刺激」である。[13] このような道具立てを行った上で、フロイトは、上記の二種類の心的現象を、次のように記述する。すなわち、「外部からの刺激」が、感覚器官とϕ ニューロンを介して、ϕ ニューロンに受け取られることによって生じる心的現象を「知覚」と呼ぶ。一方、「内因性刺激」が、直接ϕ ニューロンに受け取られることによって生じる心的現象を「(想像的) 表象 imaginary idea」(=「回想 remembering」) と呼ぶ。[14]

ただし、精確に言えば、ϕ ニューロン自体が「知覚」を行うのではない。ϕ ニューロンに「外部からの刺激」が到達することで生じるϕ ニューロン内部の興奮刺激が、更に、もう一つ別の種類のニューロンに伝えられることによって初めて、「知覚」が生じる。フロイトは、この第三のニューロンを「ω ニューロン」あるいは「知覚ニューロン」と呼ぶ。[15] つまり、「外部からの刺激」を受容したϕ ニューロンの中に生じる興奮刺激 (量Q+質) の質的側面が、更にω ニューロンに伝えられて、「意識的感覚 conscious sensations」[16]、「感覚的質 sensory qualities」[17] が生じるのである。

この「意識的感覚」が、私たちの通常の意味での「知覚」のことだと見てよいようなのだが、フロイトによれば、「意識の内容」にはもう一つ「それとは非常にちがった別の系列」がある。それは、「快と不快の感覚の系列 the series of sensations of *pleasure and unpleasure*」である。[18]

(A) フロイトは、「不快を避けるという心的生活の一傾向」について私たちが知っている以上、この傾向を、「不活発状態 inertia へと向かう基本的な傾向」(the principle of *inertia*) と同一視したい誘惑を感じると述べる。これは、快に対する欲求を、不活発状態への欲求と見なす考え方である。そして、心的「不活発状態」とは、「草稿」モデルにおいては、量Qの水準が低いことを意味するから、快に対する欲求とは、量Qの水準の低さへの欲求ということになる。

(B) そして、もしもこの同一視が正しいとするならば、「不快」とは、Q_ηの水準の上昇、すなわち量的圧力の増大と一致しなければならないだろう。逆に「快とは、放出 discharge の感覚である

だろう」。フロイトの考えでは、ϕ ニューロンと ω ニューロンとは一種の「通底器 intercommunicating vessels」をなしており、「ϕ ニューロンの水準が上昇すると、ω ニューロンの中のカセクシスが増大し、反対に、水準が下降すると、カセクシスは減少する」。よって、不快とは、ϕ ニューロンの中で Q_η が増大する時の ω ニューロンの感覚であるだろうし、快とは、ϕ ニューロンの中で Q_η が減少する時の ω ニューロンの感覚であるだろう。

それでは、先に述べた「意識的感覚・感覚的質」と「快と不快の感覚」との関係はどうなっているだろうか。

（C）フロイトによれば、「快と不快との間の無関心の領域に位置する感覚的質を知覚する性質 aptitude は、快と不快の感じ the [presence of the] feeling of pleasure and unpleasure が起こると、消失する」。

（D）つまり、「ω ニューロンは、ある特定の（強さの）カセクシスの時に、ニューロンの動きの周期 period を受容するための最適状態になる。カセクシスがより強い時には、ω ニューロンは不快を生み出し、より弱い時には、快を生み出す。そして、それはカセクシスが無くなってしまい、ニューロンの動きの周期を受容することが出来なくなるまで続く。」つまり、「意識的感覚」とは、快と不快との間の中間状態であり、「意識的感覚」と「快と不快の感覚」とは両立しえないものと見なされているわけだ。

以上のような道具立てを用いて「草稿」モデルは展開していくのだが、本稿において問題にしたいのは、上記の「ニューロン」その他が実在するかどうかという点ではない。あくまで、それらの道具立てを用いてなされる論理構成にだけ注目していきたい。

まず、「諸ニューロン間のすべての結びつきの基礎」となるのは、「同時性による連想 association by simultaneity」であると言う[19]。それでは、「同時性による連想」とは何だろうか。

過去において、イメージ α とイメージ β とをたまたま同時に記憶したとしよう。すると、その後再びイメージ α を思い出す時（つまり、イメージ α に対応する或る特定の ϕ ニューロンに量Qが流れ込む時）、それと同時に、イメージ β も思い出されてくる（つまり、イメージ α に対応する ϕ ニューロンに流れ込んだ量Qが、直ちに、イメージ β に対応する ϕ ニューロンへと移動していく）。そしてその結果、イメージ α に対応する ϕ ニューロンに流れ込んでいた量Qは減少することになる[20]。

たとえば、イメージ α を〈授乳によって生じる生理的な満足体験〉、イメージ β を〈授乳による満足体験と同時に得られた、口唇の触感〉だとしてみよう[21]。まず、主体（この場合は幼児）が空腹になると、イメージ α すなわち〈授乳によって生じる生理的な満足体験〉に対応する ϕ ニューロンに量Qが流れ込む。つまり、授乳してもらいたくなる。もしも、「同時性による連想」などがなければ、その後の事態は簡単だ。幼児は泣き声をあげ、結果的には養育者から授乳してもらうことになるだろう。しかし実際は、「同時性による連想」があるために、事態は違った風に展開する。イメージ α に対応するニューロンに流れ込んだ量Qは、「同時性による連想」に

よって、イメージβすなわち〈口唇の触感〉に対応するψニューロンへと移動していく。すると、〈授乳によって生じる生理的な満足体験〉そのものに対する欲求が減少し、その代わりに、〈口唇の触感〉の方を欲するようになる。

このような考え方は、人間の欲望の特徴をよく表しているように思われる。つまり、「同時性による連想」によって、本来の生理的欲求が、生理的ではないイメージ的・情報的な欲望へとすり替えられるというわけだ。たとえば、おしゃぶりの使用がそうであるし、また、大人の場合でも、食べ物のおいしさ（イメージβに相当する）への執着がそうである。

だが、このような、欲望の「同時性による連想」メカニズムは、幼児にとって致命的な問題を引き起こす。幼児の生存にとっては、イメージαをもたらす外界の対象の獲得（つまり、現実に授乳してもらうこと）が必要であるのに、「同時性による連想」によるすり替えによって、幼児は、イメージβ（つまり、口唇の触感）の方を追求してしまうことになるからだ。フロイトは、この問題を次のように表現する。すなわち、「幻覚にもとづいて反射的な行為がひき起こされるならば、必ず失望に終わる。[22]」そして、このような「幻覚にいたるまでの願望備給と十分な防衛の消費をともなう不快の完全な発展」を、「心的な一次過程」と呼んでいる。[23] 要約して言えば、イメージが外界の対象の現実的獲得のために役立たずに、もう一つ別のイメージの追求へとすり替わってしまうこと――これが、「一次過程」における致命的問題である。

「一次過程」におけるこの問題を解決するためには、何が必要だろうか。それは、イメージがもう一つの別のイメージへと連想的にすりかわってゆくという状態そのものを変更することだろう。別の言い方をすれば、〈イメージと、そのイメージが意味する現実的対象との対応関係〉を確立することだろう。既述の例で言えば、授乳によって得られる心的満足（イメージα）と、現実の授乳体験との対応を確立することだ。別の側面から言えば、「知覚 perception と表象 idea とを区別する基準をどこからか得る必要がある。[24]」つまり、外部からの刺激によって生じる「知覚」と、内部からの刺激によって生じる「表象」とを区別できるようなメカニズムが必要なのである。

このような「草稿」の考え方は、奇妙に見えるだろう。なぜならば、外部からの刺激と内部からの刺激との区別は、出来て当然のように思えるので、敢えて、その区別のための基準が必要とは考えにくいからだ。しかし、「草稿」の考え方によれば、「知覚」と「表象」とを区別出来ないという点こそが、人間の心的装置の基礎条件（「同時性による連想」に従う「一次過程」）なのである。

フロイトは、この「知覚と表象を区別する基準」を、「現実指標 the indication of reality」と呼び、[25]「現実指標」を用いて「「知覚と表象を区別する」ことを、「現実性判断あるいは確信 a judgement of reality, belief」と呼ぶ。[26] そして、この「現実指標」は、ωニューロンから来ると言う。つまり、ωニューロン（知覚ニューロン）が、「現実性判断」を担っているのだ。

だが、「現実指標」が適切に機能するためには、ある一定の条件が成立していなくてはならない、とフロイトは付け加える。すなわち、「自我による禁止」によって、量Qが小さくなっている場合にのみ、「現実指標」は適切に機能すると言う。[27] なぜこのような条件が必要なのかといえば、量Qが充分に大きい場合には、量Qが外部からの刺激であろうと内部からの刺激であろうと関係なく（つまり、「知覚」だろうと「表象」だろうと関係なく）、つねに「現実指標」が機能してしまうからだと言う。

このように「自我による禁止」の下で「現実指標の適切な使用 a correct employment of the indications of reality」が行われ、その結果、「現実性判断」が成立している状態を、フロイトは「二次過程」と呼ぶ。[28]

それでは、「二次過程」を成立させるのに必要不可欠な「現実性判断」とは、どのようなメカニズムなのだろうか。「草稿」によれば、それは「同一性 an identity」を確立することである。[29] 既述のように、「現実性判断」が出来るためには、「知覚」と「表象」とを区別する何らかの基準（「現実指標」）が必要なわけだが、この基準とは何だろうか。それは何よりも、〈現実の外的対象を確実に意味している心的イメージ〉であろう。つまり、そのような基準となるイメージと、一致するイメージは「知覚」であり、一致しないイメージは「表象」であると判断するわけだ。

では、この〈現実の外的対象を確実に意味している心的イメージ〉とは何だろうか。フロイトによれば、それは、「最初に満足を与えてくれる対象であると同時に最初の敵対的対象」であるもののイメージである。[30] つまり、最初に経験したイメージこそが、「現実指標」なのだ。そうだとすれば、「現実性判断」とは、主体が今感じているイメージが、最初に経験したイメージと一致するかどうかを判断することだと言えるだろう。

以上のような議論をした後で初めて、「草稿」は夢の問題に取り掛かる。つまり、「二次過程」の機能が弱まり、「一次過程」が観察できる数少ない機会が睡眠時であり、「一次過程」の諸性質を知るための恰好の素材が、夢なのだ、とフロイトは言う。[31] そしてスタンダード版の脚注によれば、「草稿」のこの部分こそが、『夢判断』の先駆を成しているのである。実際、『夢判断』において有名な「夢とは願望充足である」という言明は、「草稿」のこの部分に既に現れているし、[32] 精神分析理論確立にとってもっとも重要な夢である「イルマの注射の夢」が、ごく簡単にではあるが、分析されて、[33]「草稿」の第一部は終了しているのである。

このような「草稿」の議論の流れを見てくると、フロイト理論が夢を問題にすることの論理的な背景が明らかになってくるように思われる。つまり、「知覚」はいかにして成立するか、リアリティはいかにして構成されるか、という問題についての論理的思考を背景にして初めて、夢は問題となるのだ。

3．「草稿」の内在的矛盾

ここまで、「草稿」第一部の議論を要約しながら、その基本的なロジックを追ってきたわけだが、上記の「一次過程」から「二次過程」への転換の問題が、後年のフロイト理論におけるエディプス・コンプレックスの克服の問題に対応することは言うまでもない。しかしながら、ここで私たちは当面、二つの疑問点にぶつかる。

まず第一に、「現実指標の適切な使用」に関わる疑問である。「草稿」によれば、量Qが充分に大きい場合には「現実性判断」は不可能なのだが、量Qが充分に小さい場合にはそれが可能だ、ということになるわけだが、もしそうならば、知覚と表象が区別出来る状態（二次過程）と、知覚と表象が区別出来ない状態（一次過程）との違いは、単に、量Qの大きさの違いという〈量的な〉違いということになりはしないだろうか。そして、ひいては、（現実的）「知覚」と（想像的）「表象」との違いは、質的な違いではなく、量的な違いということになりはしないだろうか。もしそうだとすれば、現実的対象がある場合（「知覚」）と現実的対象がない場合（「表象」）との違いは、連続的だということになる。しかしこれでは、存在と不在との違いが連続的だということになってしまう。このような考え方は、常識的リアリティ観から見て、受け入れがたい。[34]

第二の疑問は、最初に経験したイメージが、「現実指標」になるという点に関している。一見すると、このことはもっともなように思える。なぜなら、最初の経験（大抵は、最強度の経験）とは、すなわちオリジナルであり、オリジナルは堅固な現実性を与えてくれるように思えるからだ。しかしながら、「草稿」の議論の出発点において、心的装置の基礎条件すなわち「諸ニューロン間のすべての結びつきの基礎」となるのは「同時性による連想」だったはずだ。つまり、「一次過程」におけるイメージは、それが「知覚」なのか「表象」なのか区別がつかないはずだ。そして、最初の経験のイメージは当然「一次過程」におけるイメージであるはずなのに、どうしてそれが「表象」ではなく「知覚」であると保証されうるのだろうか。「同時性による連想」を議論の出発点とする限り、最初に経験したイメージが「現実指標」になることは原理的に不可能ではないだろうか。

このように、「草稿」の内在的な議論だけからでは「現実性判断」が成立不可能であるように見えるにもかかわらず、フロイトが「現実性判断」メカニズムの妥当性を信じていたとするならば、何か「草稿」の議論に内在していない要素が、外部から密輸入されたと考えざるをえない。それは何だろうか。筆者の考えでは、それは、〈最初の経験のイメージは、それがまさに最初であるが故に、現実的であるはずだ〉という暗黙の信念だと思う。つまり、〈最初であること〉に、リアリティの基準としての特権性を与えることによって初めて、「現実性判断」メカニズムは完結するように思われる。[35] そして、このような特権性は、「草稿」の内在的な議論だけからは保証できないのだから、結局のところ、「一次過程」から「二次過程」

への転換メカニズム自体が、亀裂を孕んでいるということになる。更に、冒頭で述べたように、「草稿」モデルが後年のエディプス・コンプレックス理論の先駆形であるとするならば、エディプス・コンプレックス理論もまた、同様の亀裂を孕んでいると言えるのではないだろうか。

議論が内在的に完結出来ていないという意味では、確かに「草稿」は失敗作であるかもしれない。しかし別の見方をすれば、「草稿」を読むことで、フロイト理論が背後に持っている暗黙の信念を、簡潔に浮かび上がらせることが出来るとも言える。そして更に、背後にある暗黙の信念を除き、「草稿」の内在的な論理だけを徹底させる時、そこから、著者であるフロイト自身が意識的に意図したのとは異なるリアリティ論が展開できるように思われるのである。

4. 「草稿」における二種類の「快感原則」解釈

「草稿」を読む上でもっとも興味深いのは、この論文においては、上記のような議論の亀裂が比較的純粋な形で表現されているため、フロイトの思考の現場を垣間見るのに便利だという点である。以下では、「草稿」モデルが孕んでいるもう一つの亀裂を、「一次過程」にだけ話を限定して論じていこう。

「一次過程」に関する諸問題は、快／不快が如何なる性質を持つかという問題に集約されるだろう。既述した、「一次過程」における快／不快メカニズムは、スタンダード版の脚注にもあるように、後年のフロイト理論における「快感原則」の原型をなすものである[36]。それでは、「草稿」における快／不快メカニズムも、「快感原則」解釈でうまく理解することが出来るのだろうか。

「快感原則」は、従来、次のように解釈されてきた。すなわち、欲動エネルギー（「草稿」では、量Q）の水準が低い場合には、快が生じ、逆に、高い場合には、不快が生じると。だから、快を追求しようとする心的装置の基本傾向は、欲動エネルギーの水準をゼロにすることを目指すと。たしかに一見すると、上記の「草稿」モデルにおいても、このような従来の「快感原則」解釈通りに、快／不快を説明しているように見える。しかし、よく見ると、「草稿」モデルはそれだけでは説明できないように思われる。

つまり、第二節で示した快／不快メカニズムの（B）を素直に読めば、不快を生み出すのは、量Qの水準の高さではなく、量Qの水準の上昇である。一方、快を生み出すのは、量Qの水準の低さではなく、量Qの水準の下降である。つまり、快／不快を生み出すのは、量Qの状態ではなく、量Qの変化なのである。

もしこの解釈が正しいとすれば、説明メカニズムの（C）の解釈（「意識的感覚」と「快と不快の感覚」との関係）も変わってくることになる。すなわち、〈快や不快が生じている時、つまり量Qの水準が変化している時には、「意識的感覚」が知覚されない〉という言明は、〈通常の意味での知覚に相当する「意識的感覚」とは、量Qの静的状態のことであり、それゆえに、快・不快が生じている時、すなわち量Qが変化している時には、「意識的感覚」は知覚さ

れない〉ということを意味すると思われる。

ただし、第二節の快／不快メカニズムのうち、（A）（D）は、明らかに、従来の「快感原則」解釈と同じであることは否めない。つまり、「草稿」における「快感原則」解釈（そういう命名はまだされていなかったが）は、二種類の解釈の混合なのである。[37]

だが、もし従来の解釈が正しいとすると、「意識的感覚」を感じることが出来るのは、量Qがある特定の水準に静止している場合だけであり、（静止状態だろうと変化状態だろうと）それ以外の全ての状態では、快／不快の感覚が生じてしまい、「意識的感覚」を感じることが出来ないことになってしまう。これでは、「意識的感覚」を感じることは事実上、殆ど不可能になってしまう。

また、もし、従来の解釈の言う通り、快を生み出すのが《量Qの水準の低さ》であるならば、心的装置は、ただちに量Qの水準をゼロにして、最大の快を得ようとするはずだ。ところが、量Qの水準がゼロということは、心的装置が死んでいる状態なのだから、心的装置は死の状態を目指すという奇妙な結論になってしまう。つまり、従来の「快感原則」解釈を維持しようとするかぎり、「死の本能」という不可解な結論に到ってしまう。[38]

しかし、〈快／不快を生み出すのは、量Qの状態ではなく、量Qの変化だ〉という「草稿」特有の解釈を採用すれば、今挙げたような問題は生じなくなる。

まず、「意識的感覚」と「快と不快の感覚」との関係について言えば、量Qの水準が静止していさえいれば、量Qの水準の値がいくらであっても、「意識的感覚」を知覚することが出来る。

次に、「死の本能」について言えば、「草稿」特有の解釈によれば、快は、量Qの水準が下降することから生じる。これは一見すると、従来の解釈と同様、量Qがゼロになる状態を目指しているように思えるが、実際はそうではない。なぜならば、量Qがゼロになってしまえば、それ以上、下降できないわけで、それでは快を得ることが出来なくなってしまう。下降（快）できるためには、上昇（不快）がなければならないのだ。つまり、「草稿」特有の解釈による「快感原則」では、ある静止状態（たとえば、量Qがゼロの状態）が目指されているのではなく、量Qの水準の下降と上昇の反復が目指されているのである。

以上のように二種類の解釈を比較してみると、論理的な整合性の点で、「草稿」モデル特有の解釈の方が優れているように、筆者には思われる。

このように「快感原則」についての新しい解釈を要求する「草稿」モデルが、後年の論文「快感原則の彼岸」に影響を与えていること、筆者が最後に注目したいのは、この点である。

5．「草稿」の視点から見た「快感原則の彼岸」

「精神分析の理論において、私たちはためらうことなく、次のように仮定する。すなわち、心的出来事がたどる軌跡は自ずと、快感原則によって規制されていると。」[39]という一文から始まる「快感原

則の彼岸」は、一言で言えば、「快感原則」という仮定から何が帰結するかを詳細に論じた論文だと言える。しかし、「快感原則は実際、死の本能に仕えているように見える。[40]」という有名な言明を含む末尾部分のあいまいさを見れば分かるように、この論文は、ひとつの明確な結論に到達することよりも、多くの理論的可能性を可能性のままで提示することを目指した論文である。

「草稿」からの視点を取ることによって、この論文の一つの特徴を指摘することが出来る。つまり、この論文における「快感原則」の解釈には、構造的に異なる二種類があり、フロイト自身知らないうちに、この二種類を混同して用いているのだ。

まず、第一の解釈は、「不快を興奮の量の増加と対応させ、快を興奮の量の減少と対応させるというやり方[41]」である。ここで、ペリカン版フロイト著作集の注が「草稿」を参照しているように、この解釈は、既述の「草稿」特有の「快感原則」解釈（量Qの変化に注目する解釈）と一致する。また、別の表現では、「快と不快の感じを決定するファクターはおそらく、一定の時間内において増減した興奮の量の程度なのである[42]」とも言う。（この引用で、「一定の時間内において」の部分に強調を置いたのは、フロイト自身である。）つまり、「一定の単位時間内におけるカセクシスの大きさの変化」と、「カセクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」とを明確に区別した上で、快／不快は、「一定の単位時間内におけるカセクシスの大きさの変化」の方と結びつくと見なされているわけだ。[43]このように、「快感原則の彼岸」では、「草稿」独自の視点がより明確化された形で復活している。

一方、第二の解釈では、「快感原則」は、「心的装置から興奮を完全に除去すること、あるいは、心的装置の中の興奮の量を一定に保つか、あるいは出来るだけ低く保つかすること」を目的とすると見なされている。そしてこのことは、「あらゆる生命体が持つもっとも普遍的な努力――すなわち無生物世界の静止状態への回帰」（「死の本能」）と関係していると言う。[44]これは、従来の「快感原則」解釈がそうであるように、〈量Qの少なさ〉によって、快が生じ、〈量Qの多さ〉によって、不快が生じるという解釈である。この第二の解釈の方が、第一の解釈よりもずっと一般的に流布しているので、馴染み深いだろう。

たとえば、『精神分析用語辞典』の「快感原則」の項目を見てみると、[45]上記の第二の解釈の方だけが問題にされており、あらかじめ、第一の解釈の可能性が排除されているのが分かる。このような立場が、従来の「快感原則」解釈を代表していると言えるだろう。従来の「快感原則」解釈に、このような欠落があることに気付くこと――これが、「草稿」からの視点ではないだろうか。

フロイト理論における「草稿」の重要性は、第一の解釈すなわち、〈量Qの絶対値ではなく、その変化の方に注目する快感原則の解釈〉と深く関わっているものと思われる。なるほど、たしかにフロイト自身は、「草稿」においても、また「快感原則の彼岸」においてさえも、第一の解釈を徹底させたわけではなかった。フロイト自身が、二種類の解釈の間で生涯揺れ続けたというのが、実情だろう。しか

し、従来、「快感原則」の解釈が、あまりに第二の解釈の方に偏りすぎてきたように、筆者には思われる。第一の解釈にも相応の注意を払うことで、フロイト理論を更に多面的に捉えうるようになるのではないだろうか。実際にこの第一の解釈が、どのような諸帰結をもたらし、その結果、フロイト理論がどのように再構成されるのか、とりわけ、冒頭で述べたような、「草稿」特有の〈二者関係から成るエディプス・コンプレックス・モデル〉と、第一の解釈とがどのように関係するのかについては、別に稿を改めて論じたい。(46)

注

(1) Jean Laplanche et J.-B. Pontalis, *Vocabulaire de la psychanalyse*, Presses de Universitaire de France, 4e édition revue, 1973（村上仁監訳『精神分析用語辞典』みすず書房、一九七七、二八頁）。

(2) Sigmund Freud, "Project for a Scientific Psychology," translated by James Strachey. in James Strachey ed., *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud Vol.1*, The Hogarth Press, 1966.（小此木啓吾訳「科学的心理学草稿」、懸田克躬・小此木啓吾訳『フロイト著作集　第七巻　ヒステリー研究他』人文書院、一九七四）。

(3) *Ibid.*, p.290. 人文書院版には、スタンダード版の解説は入っていない。

(4) *Ibid.*, p.291.

(5) *Ibid.*, p.290.

(6) *Ibid.*, p.290.

(7) 小此木啓吾「改題およびメタサイコロジィ解説」、井村恒郎・小此木啓吾他訳『フロイト著作集　第六巻　自我論・不安本能論』人文書院、一九七〇所収、四三七頁。

(8) Freud, *op.cit.*, p.318.（邦訳、二五四頁）。本稿におけるフロイトからの引用は、邦訳と必ずしも同一ではない。

(9) *Ibid.*, p.326.（邦訳、二六一頁）。

(10) たとえばジャック・ラカンの理論が、そのような理論だと思われる。ラカンは『セミネール』の中で、「草稿」の重要性を強調しながら、「草稿」から『夢判断』への展開において「フロイトが機械論的な思考から心理学的な思考へと転換した」という従来の解釈を批判し、「フロイトの思考は常に首尾一貫していた」ことを主張している。(Jacques Lacan, *L'éthique de la psychanalyse(1959–1960), séminaire, livre VII*, Seuil, 1986, p.45. Jacques Lacan, *Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse(1954–1955), séminaire, livre II*, Seuil, 1981, pp.117–162., p.138.) だが、「草稿」モデルと、〈本当の〉エディプス・コンプレックス・モデルとの間に、既述のような構造上の違いがあることを思えば、ラカンが、フロイトの思考の首尾一貫性を主張するのは奇妙に映る。しかし、もし私たちが自明と見なしている前提 ―― 〈本当の〉エディプス・コンプレックス・モデルは三者関係から成っているという前提を放棄すれば、ラカンの主張は奇妙ではなくなるだろう。つまり、エディプス・コンプレックス・モデルは、見かけ上は三者関係であるが、実際は二者関係であると。よって、自明視されてきた従来のエディプス・コンプレックス解釈自体を問題にする必要があると。

(11) Freud, *op.cit.*, p.297.（邦訳、二三四頁）。

(12) *Ibid.*, p.300.（邦訳、二三七頁）。

(13) *Ibid.*, p.304.（邦訳、二四二頁）。

(14) *Ibid.*, p.308.（邦訳、二四六頁）。*Ibid.*, p.325.（邦訳、二六〇頁）。

(15) *Ibid.*, p.309.（邦訳、二四六頁）。

(16) *Ibid.*, p.309.（邦訳、二四六頁）。

(17) *Ibid.*, p.312.（邦訳、二四九頁）。

(18) *Ibid.*, p.312.（邦訳、二四九頁）。

(19) *Ibid.*, p.319.（邦訳、二五五頁）。
(20) *Ibid.*, p.319.（邦訳、二五五頁）。
(21) *Ibid.*, pp.328-329.（邦訳、二六三頁）、および Joël Dor, *Introduction à la lecture de Lacan -1. L'inconscient structuré comme un langage*, Editions Denoël, 1985.（小出浩之訳『ラカン読解入門』岩波書店、一九八九、一六二頁）の次の言明を参照。「ラカンが指摘しているように、食物の欲求において欲動を満足させるもの、それは食物という対象ではなくて、《口の快感》である。」
(22) Freud, *op.cit.*, p.319.（邦訳、二五六頁）。
(23) *Ibid.*, pp.326-327.（邦訳、二六二頁）。
(24) *Ibid.*, p.325.（邦訳、二六〇頁）。
(25) *Ibid.*, p.325.（邦訳、二六一頁）。
(26) *Ibid.*, p.333.（邦訳、二六七頁）。
(27) *Ibid.*, p.325.（邦訳、二六一頁）。
(28) *Ibid.*, p.327.（邦訳、二六二頁）。
(29) *Ibid.*, pp.328-332.（邦訳、二六三～二六七頁）。
(30) *Ibid.*, p.331.（邦訳、二六五～二六六頁）。
(31) *Ibid.*, pp.335-343.（邦訳、二六九～二七五頁）。
(32) *Ibid.*, p.340.（邦訳、二七三頁）。
(33) *Ibid.*, p.341.（邦訳、二七四頁）。
(34) たしかに、「草稿」第一部の「第一五節　ϕ における一次過程と二次過程」における議論だけを見る限りでは、一次過程と二次過程との違いは、量的な違いにすぎないように見える。しかし、その後の「第一八節　思考と現実」では、一次過程と二次過程との違いについて、別の角度から検討されている。それによれば、〈二次過程とは、一次過程を、より少ない量Qによって繰り返すことだ〉という第一五節の結論を再確認した上で、より大きな量Qがより小さな量Qへと転換することから、いかなる問題が引き起こされるか、について論じていく（*Ibid.*, p.334.（邦訳、二六八頁））。その結果フロイトは、「ただ一つの可能な答え」として、「副次備給」という新しいメカニズムを導入することになる。このメカニズムについては、『ソシオロジ』社会学研究会、一一六号掲載予定の拙稿を参照。
(35)「満足の最初の体験」の特権化については、Dor, *op.cit.*（邦訳、一六五頁）参照。フロイトの暗黙の信念については、若森栄樹『精神分析の空間 ――ラカンの分析理論 ――』弘文堂、一九八八、二二七～二二八頁参照。本稿は、この著書に多くを負っている。
(36) Freud, *op.cit.*, p.312.（邦訳、三一六頁）。但し、邦訳では部分的に省略されている。
(37)「草稿」の冒頭部分でも、たしかに、「量Q_nの水準をゼロにしようとする根源的な傾向」という表現が用いられている。*Ibid.*, p.297.（邦訳、二三五頁）参照。
(38)「草稿」の中では、この側面はあらわにはならないが、ある意味で「草稿」の理論的再生とも言える「快感原則の彼岸」では、この側面が全面的に展開されている。
(39) Sigmund Freud, "Beyond the Pleasure Principle" in *The Pelican Freud Library vol.11 On Metapsychology : The Theory of Psychoanalysis*, Penguin Books, 1984, p.275.（小此木啓吾訳「快感原則の彼岸」、小此木啓吾・井村恒郎他訳『フロイト著作集　第六巻　自我論・不安本能論』人文書院、一九七〇所収、一五〇頁）。
(40) *Ibid.*, p.338.（邦訳、一九四頁）。
(41) *Ibid.*, p.276.（邦訳、一五一頁）。
(42) *Ibid.*, p.276.（邦訳、一五一頁）。
(43) *Ibid.*, p.337.（邦訳、一九三頁）。
(44) *Ibid.*, p.336.（邦訳、一九三頁）。
(45) Jean Laplanche et J.-B. Pontalis, *op.cit.*（邦訳三九頁）。
(46) 前掲の拙稿を参照。